

世界を創造する協働

—— A. A. ボグダーノフの思想における宇宙と人間の進化 ——

佐 藤 正 則

1. はじめに

A. A. ボグダーノフ (1873—1928) はボリシェヴィキの中で、大きな精神的影響力をもっていた。たとえば、建神主義やプロレトクリト、テイラーリズムといった、ボリシェヴィキがおこなったさまざまな実験の多くがボグダーノフの強い精神的影響の下にあった。もっとも、ボグダーノフを傑出した大思想家として考えるのは正しくないであろう。むしろ、彼はボリシェヴィキの活動家たちが共通して抱いていた思想やメンタリティーをもっとも顕著なかたちで表現していたのであり、それゆえ多くのボリシェヴィキの活動家たちに共感をもって受け入れられたのだと考える方が妥当であろう。したがって、彼の思想を検討することによって、ボリシェヴィキのメンタリティーのある重要な一面を明らかにできるはずだ。

しかしながら、現在までのところ、ボグダーノフの思想が十分に研究されているとは言いがたい。彼の認識論や自然観、科学観、社会論、歴史観をたがいに結びつけることができず、そのため彼の世界観の全体像は不明のままである。とりわけ、多くの場合、彼の哲学は認識論としてしか考えられてこなかった。このことがボグダーノフの世界観の解明にとって最大の障害となってきたといっても過言ではない。

また、その全体像が不明確であるため、彼の哲学をロシアや西欧の思想史上にどのように位置づけるのかという問題に関しても、はっきりとした展望が見いだせない状況にある。彼の哲学をもっぱら認識論としてとらえる視点からでは、せいぜいロシア・マルクス主義の認識論上の異端、風変わりな思想の持ち主とみなすことができるのみであろう。

とりわけ、彼の思想には生物学的な側面がきわめて強く、進化論の影響が顕著であるにもかかわらず、このことは従来あまり重要視されてこなかった。彼の思想を認識論としてとらえるのではなく、その生物学的な特徴、進化論的思考に注目することで、これまでとは異なる視点から彼の哲学の全体像を描きだ

することができるであろう。また、こうした視点からボグダーノフをとらえることで、ロシアや西欧の思想史上における位置づけもこれまでとは異なるものとなるのではないかと期待される。

本稿では、『経験一元論』第3巻（1906）までの、いわばボグダーノフの思想体系の生成期の著作を中心にして、彼の思想に顕著な生物学的、進化論的な特徴に注目し、彼の思想における人間と宇宙の進化論を明らかにしたい。

なお、筆者はすでに、拙稿「A. A. ボグダーノフの宇宙観と人間観——協働による集団的肉体の創造——」において、本稿とはやや異なる視点から、ボグダーノフの思想の全体像を描きだすところみをおこなっている⁽¹⁾。本稿はこれと相互補完的な関係をなすはずである。

2. 変化しつづけるプロセスとしての自然

ボグダーノフは、とりわけニュートン（1643—1727）の運動法則を批判の対象として、物体が永遠に不変で個別性を保つと考えることはスタティックにすぎると述べている。ボグダーノフによれば、物はずねに外界との相互作用によって変化しており、「自然、すなわち認識される現実においては、変化こそが不変の本質である」⁽²⁾。

さらにボグダーノフは、物の個別性は相対的なものでしかなく、その個別性はたんに「ダイナミックな均衡（подвижное равновесие）」によって保たれているにすぎない、と主張する。たとえば、人間の肉体を構成する物質はずねに新陳代謝によって変化しているのだが、その変化が漸進的であるため、一見したところ目に見えないということではかない⁽³⁾。したがって、ボグダーノフは「物」という概念のかわりに、すべての存在を「プロセス」と呼ぶべきだとしている⁽⁴⁾。

また、ボグダーノフはF.オストワルド（1853—1932）のエネルギー論の強い影響下にあり、あらゆる現象を同一単位で測定できるエネルギーの増減としてとらえようとした。あらゆる変化は本質的に量的なものとなり、質的な相違はなくなる⁽⁵⁾。世界はエネルギーがずねに増減しつづけているプロセスの集合ということになる。

しかし、ボグダーノフはオストワルドのエネルギー論をそのまま受け入れたのではない。ボグダーノフはこう述べている。「エネルギーは彼〔オストワルド—引用者〕においてはしばしば、経験の諸事実の相互関係の純粋な記号から、経験の実体、世界の物質に転化してしまっている」⁽⁶⁾。ボグダーノフは、エネ

ルギーとは物の「実体」ではなくて、その関係であると考えた。エネルギーの総体とはつねに相対的な量であって、ある「物」が他の「物」に引きおこしうる変化の度合いのことである⁽⁷⁾。

このようにボグダーノフの世界観においては、あらゆるものがつねに相対的で、つねに変化しつづけている。そして、こうしたあらゆるものの可変性が人間と世界が進化することを可能にしている。

3. 生命とその自然への適応

ボグダーノフは、ダーウィニズムにしたがい、あらゆる生命プロセスは生存闘争において外的自然に適応しようとするものであると考えた。生物はつねに外的自然からの破壊的な作用を受けつづけている。その作用の下、生物はみずからの生命形態を保持するために、遺伝と淘汰を通じてみずからの形態を変化させる。それとともに、生物はつねに外界にはたらきかけ、外界を変化させ、その作用がみずからを破壊させないようにしようとする。これがボグダーノフが言うところの生存闘争である。生命の完全な維持というものはありえないのであって、生命を維持することはみずからの形態を変化させることである。こうした相互作用を通じて生物はみずからの適応能力すなわち生命力を高め、進化していく⁽⁸⁾。

注目すべきことは、ボグダーノフの考える適応がけっして受動的なものではないという点である。それはみずからの形態ばかりでなく、外的自然さえもつくりかえようとする積極性をもっている。そして生物の進化は生物内部で自動的に生じるのではなく、つねに外的自然との相互作用によるものである。ボグダーノフはこうした生物学的な視点を人間の心理や社会にまで適用することで、心理や社会をも外的自然に適応しようとする生物の機能とみなし、そうすることで人間や世界を進化論的にとらえようとした。以下の節で、心理と社会とをボグダーノフが生物学的視点からどのようにとらえたのかを概観する。

4. 生命機能の一つとしての心理

前節で述べたように、ボグダーノフは、生命形態はつねに変化しており、そうした変化の中でみずからの適応力を高めるものを選択していると考えた。ここで注目すべきことは、彼にとっては生命形態の物理面での変化も心理面での変化も異なる意味をもつものではなく、いずれも生命の維持、拡大のための手段とされていることである⁽⁹⁾。つまり人間の心理も生命機能の一つであり、外

的自然に適応しようとする生物の生存闘争の一つの形態ということになる。

ボグダーノフは経験とそれにもとづく人間の認識をも、外的自然とのエネルギー関係で説明しようとした。彼によれば、経験とは人間の外的自然へのはたらきかけ、およびそれに対する外的自然からの抵抗の総体である。したがって、それは有機体と環境との関係によって決定される⁽¹⁰⁾。両者が完全に均衡状態にあり、そのあいだにエネルギー的に差異がないときには、体験は生じない。心理体験、そしてそれにもとづくあらゆる筋肉の反応は、中枢神経系におけるエネルギーの均衡の崩壊によって生じる⁽¹¹⁾。外界とのエネルギーの差異があらゆる有機体の体験を生み、有機体のあらゆる運動反応を引き起こす。そして有機体のあらゆる運動反応や心理は、外界に適応しようとする機能と考えられている。

心理のもっとも根本的な機能を、ボグダーノフは快—不快という感情に見いだした。外的自然からの作用はつねに人間の心理に満足、あるいは苦痛をもたらす。こうした快—不快を、ボグダーノフはエネルギー一元論で説明しようとした。生物はみずからのエネルギー、生命力を上昇させる刺激に対しては快感、満足を感じ、みずからのエネルギー、生命力を低下させる刺激には不快感、苦痛を感じる。有機体はみずからの生命力を低下する刺激を回避し、生命力を向上する刺激を志向する。ボグダーノフはこうした有機体の心理的機能を「心理淘汰 (психический подбор)」と呼んだ。前者は「ポジティブな淘汰 (положительный подбор)」、後者は「ネガティブな淘汰 (отрицательный подбор)」である⁽¹²⁾。

ところで、このように人間の体験や心理を外界とのエネルギー関係でとらえようとする考え方は、R. アヴェナリウス (1843—1896) に触発されたものである。ただし、アヴェナリウス、そしてその教えを受けたA. ルナチャルスキー (1875—1933) は、理想的な適応状態とは外界とのエネルギー的差異がなくなり、均衡が保たれることであると考えた。しかし、この考え方にしたがえば、有機体のエネルギーが外界よりも多くなっても少なくなっても、有機体は外界に適応できないということになってしまう。ボグダーノフは、これは進化論に反すると批判して、有機体のエネルギーが増大することをポジティブなもの、その逆をネガティブとみなした⁽¹³⁾。つまり彼の考えでは、生物は外界との均衡の維持ではなく、みずからのエネルギーの増大をめざさねばならない。ボグダーノフのきわだった進化論的思考がここにもあらわれている。

ボグダーノフは心理淘汰についてのみずからの見解を次のように描いた。外

界からの作用は人間の経験に変化をもたらす。この作用は破壊的なものであって、心理淘汰によって組織化しなければ、生はカオスと化してしまう。ポジティブな淘汰は経験に生じるあらゆる体験を明確なものにして保存しようとする機能であり、ネガティブな淘汰は経験に生じるあらゆるものを破壊しようとする。ポジティブな淘汰は人間に活動のためのエネルギーを与えるが、あらゆる体験がすべて保存されるため、心理がとりとめのない雑多な形象や意志で満たされてしまう。ネガティブな淘汰は経験に生じるあらゆるものを破壊しようとするが、ポジティブな淘汰と組みあわされるため、実際に破壊されるのは経験においてきわめて不安定なもの、つまり有機体にとって自然との関係においてあまり重要性のないもののみである。ネガティブな淘汰によって無駄なものが除かれ、経験のうち外的自然との闘争において重要なもののみが残され、心理は調和的に組織化される。こうして有機体にとって一元論的な世界観が得られる⁽¹⁴⁾。

ところで、ボグダーノフはのちに「プロレタリア文化」論において、感情の組織化を唱える。ボグダーノフが感情を重視したのは、それが人間にとって世界観形成の根源であると考えられたからであろう。

このように、ボグダーノフにとって、心理とは外界の作用に対する有機体の反応であり、心理システムは生命形態が自然に適応しようとする高次の形態である。心理システムは反射しかおこなわないアメーバのような単細胞生物から、長い進化の歴史を経て現在の人間にいたった。つまりボグダーノフは、心理の発展こそが生命力の増大、すなわち進化を意味していると考えている。とりわけ、人間は労働という意識的な生存闘争をおこなう特別な生命形態である。このことは人間において生物の進化が意識的な進化という新たな段階に入ったことを意味している⁽¹⁵⁾。

5. 生命形態の一つとしての社会

本稿はボグダーノフがダーウィン（1809—1882）の進化論の強い影響下にあったということに焦点をあてている。事実、ボグダーノフはダーウィニズムを、エネルギー論、マルクス主義とならぶ一元論的科学として絶賛している⁽¹⁶⁾。しかし、平等を説くマルクス主義と弱肉強食のダーウィニズムとが共存できるのだろうか。ここで注目すべきことは、ボグダーノフが弱肉強食のいわゆる社会ダーウィニズムを完全に否定していることである。

ボグダーノフの考えでは、淘汰とは個々の有機体、その繁殖と競争、個々の

死と保存のみにかかわるものではなく、「淘汰の単位」とはつねに相対的なものである。社会は要素の機械的な集合ではなく、その構成部分がたがいに有機的關係にある一種の生命システム（*жизненная система*）である。つまり全体としての社会が強力であれば弱い個体でも生きられるが、社会が弱ければどんな強者であっても生きられない。したがって社会全体が淘汰の単位となりうる。ボグダーノフの考えでは、社会とは生存闘争における一定の共同性の意識によって結ばれた、一つの種の有機体の集合である。それは種の適応形態の一つである⁽¹⁷⁾。

ボグダーノフは、生命形態には細胞、有機体、社会、種など、外的自然に適応するものすべてが含まれると述べている⁽¹⁸⁾。つまり社会も生命形態の一つであり、社会全体がいわば一つの有機体としてとらえられている。

このように社会を一つの有機体ととらえる考え方は、有名な血液交換の構想においてもっとも顕著なものとなっている。血液交換をおこなうことで、人々は「たがいに生命を高めるための諸条件を伝えあう」⁽¹⁹⁾。つまり人々が遺伝子を混ぜ合わせることで、生存闘争の単位が個人から集団にかわり、ある種の集団的な肉体が形成される、とボグダーノフは考えている。

したがって、ボグダーノフの考えでは、社会の発展は生物的な発展、つまり社会の生命力が増大することであり、そしてそれは生物の進化と同じ原理にもとづかねばならない。たとえば、社会は「社会淘汰」によって、社会全体の生命力を高めるものを保存し、社会の生命力を低下させるもの、社会のさらなる進化にとって障害となる過去の遺物を除去する⁽²⁰⁾。社会が外界からエネルギーを吸収することは、組織性の非組織性に対する勝利、死せる自然を生が支配することを意味し、外界へエネルギーを排出することは外界に作用をおよぼすことで外界を変化させることであり、それは自然に対する支配力、勝利を手に入れるために支払われる代価である⁽²¹⁾。このように、社会は他の生命形態と同様、生存闘争において社会的労働によって外界に変化をもたらす。ボグダーノフによれば、こうして労働によって変化させられた外的対象は生産手段と呼ばれているものであり、その領域は社会の発展とともに拡大する⁽²²⁾。つまり社会もやはり外的自然との相互作用を通じて進化し、外界を変化させていく生命形態である。それは生物の進化の一環であり、生物の進化と同じ原理にもとづいている。ボグダーノフにとって社会とは、個体を越えた高次の生命形態であり、生物の進化が新しい段階に入ったことを意味している。

ところで先にボグダーノフにとって生命の進化とは心理の発展にほかならな

いと述べた。それならば、社会も一つの心理システムでなくてはならない。これについてボグダーノフはどのように考えているのだろうか。次節でこの点について検討する。そして、社会の心理についてのボグダーノフの見解を検討することによって、彼の宇宙進化論の全貌が明らかにされるだろう。

6. 協働による世界の創造と生物的進化

ボグダーノフによれば、社会は生存闘争における個人の団結の形態であるが、それは意識なくしてありえない。社会的なものはすべて意識的なものであり、社会的存在とは社会的意識と同一である。社会において人々は労働という意識的な生存闘争を集団でおこなわねばならない。したがってボグダーノフは、協働（сотрудничество）を実現するためには、人々が見たもの、聞いたもの、感じたこと、望むことを他の人々とたがいに伝えあうことができなければならないと言う。こうした交流（общение）を通じて、人々の経験が共有化される（обобществляться）。こうして生じたものが社会意識、あるいはイデオロギーと呼ばれるものである。それは人々を組織化するための道具であり、したがって、社会が外的自然と闘争するための手段となるものである⁽²³⁾。

こうした社会意識、イデオロギーの形成も心理的淘汰によるものと考えられている。人々の経験の中で社会全体の生存闘争にとって意味のあるもののみが保存され、それほど意味のないものは削除される。ボグダーノフは、「模倣」「交流」「協働」といった社会に特有のプロセスはすべて心理的淘汰の結果であると述べている。とりわけ「協働」は、共同体の個々の参加者が集団労働でのみずからの役割を受けいれることが前提であり、そのためにはその個人が心理的に変化しなければならない⁽²⁴⁾。

ところで、よく知られていることであるが、ボグダーノフはE. マッハ（1838—1916）の影響の下、あらゆる存在するものは「心理的なもの」も「物理的なもの」もすべて、同じ経験の「要素」からつくられていると考えていた。「心理的なもの」とは要素が個人の経験の範囲内で組織されたものであり、「物理的なもの」とは要素が社会的に組織されたものである。両者は組織のされ方は同じなのだが、そのレベルが異なっており、「物理的なもの」は「心理的なもの」よりも組織化のレベルが高い⁽²⁵⁾。ボグダーノフの哲学についての従来の研究はこの点ばかりにとらわれていた。しかし、これは社会意識の文脈の中でとらえるべきものであり、そうすることで人間と宇宙の進化論の中に組み込むことができる。

物理的物体とは社会の中で人々に共有化された経験であり、したがって物理的物体からなる物理的世界というものは、社会というより高次に進化した心理形態にあらわれる経験ということになる。つまり物理的世界は人間社会においてはじめて生じたものであり、その領域は人々の社会的協働の領域にはかならない。

そして客観的な物理的世界とは、社会という生命形態にとって、その生存闘争において意義をもつものである。ボグダーノフは、「客観性」とは、その経験が自分ひとりにとってばかりでなく他人にとっても同一の生活上の意義をもつということであると述べている。また、ボグダーノフは真理についても同じような考えを抱いていた。彼は次のように述べている。「真理とは、経験の生きた組織化形態であり、活動においてわれわれをどこかに導き、生の闘争における拠りどころを与えるものである」²⁶⁾。ボグダーノフが「真理」を永遠不変の絶対的なものと考えることをきびしく拒否したことは広く知られているが、このことはボグダーノフの反権威主義のあらわれというだけではない。彼が言おうとしているのは、人々の社会的協働、すなわち自然との闘争の進展にともなって、生存闘争における意義が変化するのであり、したがって生存闘争における拠りどころも新しいものとなるということである。つまり、ここにも彼の生物進化的思考を見ることができる。

このようにボグダーノフにとっては、物理的世界とは人々の社会的協働によって創造される。そしてそれは生命形態としての社会が外的自然に適応するためにつくりだすものであり、したがって、物理的宇宙とは社会の生存闘争にとって意義のあるものである。

こうして、ボグダーノフの哲学において生命形態としての人間と社会が生物進化論的にどのように描かれているか、そして物理的世界がどのようなものとしてとらえられているかが明らかにされた。次節では、ボグダーノフの宇宙観をまとめるとともに、人間と宇宙のどのような将来像を彼が想定しているのかについても言及する。

7. 人間の進化と宇宙の進化

ボグダーノフの考えでは、世界とは経験の「要素」からなっており、要素が次第に組織化されることでさまざまな複合体がつくられる。外的自然とは、要素の非組織的な総体であり、要素のカオスである。無機物は組織化のレベルは低い。心理は無機物と根本的に異なるものではなく、要素がさらに高度に組

組織化されたものである。心理はアメーバのような低次の有機体から次第に発展して人間の個人的経験へといたる。高次の有機体の心理においては、低次の有機体の心理におけるよりも、要素は高度に組織化されている。人間の心理において要素はもっとも高度に組織化され、「心理的経験」「心理的なもの」を形成している。最後に、社会という生命形態において、要素は個人の心理におけるよりもさらに高度に組織化され、「物理的経験」「物理的なもの」一般に物理的世界と呼ばれているものがつくられている⁽²⁷⁾。

このように、ボグダーノフにとって、世界の進化とは無機物においても生命においても同じものである。それは組織性の増大である。世界の進化とは要素がより高度に組織化されていくことであり、それは生命形態の進化、心理システムの進化と同じことである。生物の進化が組織化であるならば、生物が闘争しなければならない外的自然の破壊的な力とは、組織性を破壊しようとする力、すなわちエントロピーの力であろう。実際、ボグダーノフはエントロピーの法則は進化に反すると述べている。生命形態のあらゆる生命機能は反エントロピーの力と考えられる⁽²⁸⁾。

ところで、ボグダーノフは要素の組織化の形態、すなわち世界の形態はもしかしたらもっと完全な形態もありうると述べている⁽²⁹⁾。つまり人間と宇宙のさらなる進化の可能性を示唆している。それでは、将来どのような世界が考えられているのだろうか。

先に述べたように、ボグダーノフの言う「エネルギー」とは物の実体ではなく、関係性である。つまり、人間の生命力とは人間が外的自然に及ぼしうる変化の度合いのことである。したがって、生命形態としての人類がさらに進化することによって、人間はさらに大きな生命エネルギーを、すなわち自然を変化させる力を手に入れることになるだろう。ボグダーノフは、やがて人間がみずからの意志と労働によって、あらゆる現象をつくりだせるようになると予言した⁽³⁰⁾。彼は、自由とはあらゆる可能な作用に対する最高の適応を意味し、隷属とは最低の適応であると述べたが⁽³¹⁾、まさしく人間は外的自然に完全に適応することによって、完全な自由を手に入れ、みずからの意志と労働によってあらゆるものをつくることができるようになる。そしてそのときには人間は無限の生命力、すなわち不死を手に入れることであろう。

ボグダーノフの哲学においては、生命形態の心理の進化とともに、世界は進化し、より高度に組織化されたものとなる。それは、生命形態が生物的に進化し、外的自然に適応し、みずからの生命力を向上させ、外的自然を支配してい

くプロセスと一致している。やがて、人類は生物としてさらに進化し、自然は完全に人間の意志と労働が支配するものとなることを、ボグダーノフは確信している。

さて、ボグダーノフの思想をこのように生物進化的にとらえることは、従来のボグダーノフ像を大きく転換させるばかりでなく、その思想史上の位置づけにも変更を迫るはずである。まず次節で、ボグダーノフのロシア思想史上の位置づけを検討する。

8. ボグダーノフとロシアの精神史

先に述べたように、ボグダーノフはダーウィニズムにしたがいつつも、個体間の生存競争を否定し、むしろ社会全体が生存闘争において団結するものであると主張した。これはクロポトキン（1842—1921）の相互扶助論を容易に連想させる。しかし、両者の個人的影響関係を検討することにはあまり意味はない。なぜならこうした傾向はこの二人に限ったことではないからである。近年、A. Vucinich や D. Todes によって、ロシアにおけるダーヴィニズムの受容が包括的に研究されている。彼らによれば、ロシアにおいては総じて、ダーウィニズムが受容される際にマルサス主義的な生存競争の理念が排除される傾向が強く、自然との生存闘争における相互扶助という考え方が好まれたという³²⁾。ボグダーノフの思想も、このようなロシアの特殊なダーヴィニズムの潮流の中に位置づけることができる。ボグダーノフ自身、ダーウインを評価しつつも、マルサス（1766—1834）の学説を誤りであると断定している³³⁾。

また、ボグダーノフの宇宙進化論もロシアの特殊な精神史の流れの中に位置づけることができる。宇宙の全一性、宇宙と人間との相互作用による連関的進化という思想は、ロシアでは19世紀末から20世紀初頭にかけて広くみられた考え方で、近年「コスミズム」という名のもとに再評価されつつある。

C. セミョーノヴァによれば、ロシア・コスミズムの特徴は積極的進化という理念である。すなわち人類が理性と倫理感によって進化の操縦桿を獲得するという考え、世界の発展の新しい意識的な段階が必要であるという考え、人間が宇宙を変容させる役割を担っているという確信である。さらに、その際、宇宙を変容させるのは個々の人間ではなく、意識的・感覚的存在の全総体であり、すべての世代を統一させた全人類であると考えられ、生命に関する一般的な宇宙科学として諸科学が統合される³⁴⁾。

本稿でこれまで述べてきたことから明らかなように、こうしたコスミズムの

特徴はボグダーノフの思想に完全にあてはまる。最近の「コスミズム」見直しの動きには、これまでロシア思想の主要潮流とされてきた革命思想に代えて、「コスミズム」をロシア思想、ロシア精神の中心として位置づけようとする傾向があるように見える。そのためか、ロシアの研究者は革命思想家やマルクス主義者を「コスミズム」に含めることには消極的のようだ。しかし、ボグダーノフの思想を「コスミズム」から排除する理由を探すことのほうが困難であるにちがいない。

ボグダーノフの思想はこれまで、ロシア・マルクス主義の一変種としてしか考えられてこなかったが、ロシアの独特な精神史の中に位置づけることが可能であるし、そうすべきものである。

9. ボグダーノフと西欧の精神史

前節で、ボグダーノフのロシア思想史上の位置づけを検討したが、それでは西欧思想においてはボグダーノフはどのようにとらえられるだろうか。まず、ボグダーノフがその哲学体系を形成した時期である20世紀初頭において、西欧思想がもっていた特徴に触れておかねばならない。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、西欧ではこれまでとは大きく異なる新しい精神潮流が生じていた。それは、デカルト的二元論とニュートンの決定論に対する反発であった。この潮流はスチュアート・ヒューズが「実証主義への反逆」と呼んだものにほかならない⁸⁵⁾。

たとえば、マッハやアヴェナリウスは物質と精神をともに感覚的要素に帰着させることで物心二元論を克服し、経験批判論と呼ばれる一元的哲学をうちたてた。動物学者E. ヘッケル(1838—1919)は生物と無生物との間には根本的な相違はないと主張し、1905年には一元論者同盟を設立するにいたった。オストワルドはあらゆる現象を同一単位で測定できるエネルギーの増減で説明できるとするエネルギー一元論を唱えた。

木田元によれば、ニーチェ(1844—1900)、ベルグソン(1859—1941)、マッハといった、19世紀末に出現した哲学者たちの思想には、背後にある超越論的存在、絶対的存在、あるいはキリスト教的神というものを否定して、世界の中に自分の身体というものを置いて物事を見ようとする見方、「それ自体世界を超越した形而上学的存在である精神ないし理性の存在とともに、その精神なり理性なりによって洞察されると信じられてきた形而上学的な背後世界の存在を否定し去り、それこそ世界のただなかに〈身〉を置く身体に開かれる世界、こ

れまでは真に存在する背後世界に対して仮象の世界、現象界として貶められてきた感覚的経験の世界に踏みとどまろうとする決意、認識を真理の把握としてではなく、生物学的機能としてとらえようとする見方、こうしたあくまでダイナミックな生の立場からする存在論」がある。それは、ダーヴィニズムそのものではないにしても、ダーヴィニズムから出てきた進化論を背景として生まれたものだという³⁶⁾。

本稿で述べてきたように、bogdanovの思想は生物進化的にとらえることができるものであり、その中に木田が指摘するような見方を見いだすことは容易である。また、実際、bogdanovは19世紀末から20世紀初頭の西欧において最先端であった思想を積極的に取り入れていた。そのことは、彼が当時の西欧と同じ精神課題を共有していたことを意味する。そして、彼は西欧の最新の哲学を取り入れながらも独自の哲学体系を構築することで、独自の解決法を見いだそうとしていた。このようにbogdanovの思想は19世紀末から20世紀初頭の西欧の精神的潮流のなかに完全に含めることができる。

10. おわりに

bogdanovの思想の生物学的側面、進化論的特徴に注目することで、これまでとは異なる新しいbogdanov像が得られた。それは、生物としての人間の意識的で積極的な進化の思想、人間の協働による宇宙の進化と自然の支配の思想の主唱者としてのbogdanovである。そして、このような視点から見たとき、彼の思想は思想史的にもたんなる異端ではなくなる。ロシア思想史上では、彼は革命思想（ロシア・マルクス主義）と「コスミズム」という二つの大きな精神潮流の接点に位置しており、さらに、彼の思想においてロシア的精神と20世紀初頭の西欧の新しい精神潮流とが合流している。こうした新しいbogdanov像は、ボリシェヴィキの精神史的研究にも新たな展望を与えるにちがいない。

註(1) 佐藤正則「A. A. bogdanovの宇宙観と人間観——協働による集団的肉体の創造——」『ロシア史研究』第58号、1996年、60—68頁。

(2) Богданов, A. A., *Основные элементы исторического взгляда на природу. Природа. Жизнь. Психика. Общество*, СПб., 1899, стр. 11-19, 27, 40.

(3) Богданов, A. A., *Основные элементы исторического взгляда...*, стр. 42-43, *Вера и наука (о книге В. Ильина, Материализм и эмпириокритицизм)*, М., 1910, стр. 152-153.

- (4) Богданов, А. А., *Основные элементы...*, стр. 18, 24.
- (5) *Там же*, стр. 32-38, 206.
- (6) Богданов, А. А., *Эмпириомонизм*, кн. III, Спб., 1906, стр. XVI-XVII.
- (7) *Там же*, стр. 35.
- (8) Богданов, А. А., *Основные элементы...*, стр. 89, 99, *Эмпириомонизм*, кн. I, М., 1904, стр. 102.
- (9) Богданов, А. А., *Из психологии общества*, Спб., 1904, стр. 41-42.
- (10) Богданов, А. А., *Философия живого опыта*, (1913) 3-е изд., М., 1923, стр. 274.
- (11) Богданов, А. А., *Эмпириомонизм*, кн. I, стр. 65, 70-71.
- (12) Богданов, А. А., *Основные элементы...*, стр. 126-127, 142-143.
- (13) Богданов, А. А., *Эмпириомонизм*, кн. I, стр. 94-98.
- (14) Богданов, А. А., *Эмпириомонизм*, кн. II, М., 1905, стр. 95-100.
- (15) Богданов, А. А., *Основные элементы...*, стр. 130, 142, 147.
- (16) Богданов, А. А., *Вера и наука*, стр. 214.
- (17) Богданов, А. А., *Основные элементы...*, стр. 67-69, 150., *Эмпириомонизм*, кн. III, стр. 1-9.
- (18) Богданов, А. А., *Из психологии общества*, стр. 39.
- (19) Богданов, А. А., *Красная звезда*, (1908) Л., 1929, стр. 107-109.
- (20) Богданов, А. А., *Эмпириомонизм*, кн. III, стр. 24-30.
- (21) *Там же*, стр. 17.
- (22) Богданов, А. А., *Основные элементы...*, стр. 175-176.
- (23) Богданов, А. А., *Из психологии общества*, стр. 50-51, 59-62. なお、ボグダーノフがみずからのイデオロギー論を包括的に論じたものとしては、*Наука об общественном сознании*, М., 1914.
- (24) Богданов, А. А., *Эмпириомонизм*, III, стр. 12-13.
- (25) *Там же*, стр. XII. なお、この点に関してより詳しくは、前掲拙稿61—62頁。
- (26) Богданов, А. А., *Эмпириомонизм*, кн. I, стр. 25, *Эмпириомонизм*, кн. III, стр. VIII.
- (27) Богданов, А. А., *Эмпириомонизм*, кн. I, стр. 177, *Эмпириомонизм*, кн. III, стр. 155.
- (28) Богданов, А. А., *Эмпириомонизм*, кн. I, стр. 181-182.
- (29) Богданов, А. А., *Эмпириомонизм*, кн. III, стр. 155, *Вера и наука*, стр. 180.
- (30) Богданов, А. А., *Философия живого опыта*, стр. 267-274.
- (31) Богданов, А. А., *Основные элементы...*, стр. 204..
- (32) Vucinich, A., *Darwin in Russian Thought*, Berkeley, University of California Press, 1988., Todes, D. P., *Darwin without Malthus: The Struggle for Existence in Russian Evolutionary Thought*, New York, Oxford University Press, 1989.
- (33) Богданов, А. А., *Тектология: Всеобщая организационная наука*. (1913-1922) М., Экономика, 1989, кн. 2, стр. 190-192.
- (34) Семенова, С. Г., «Русский космизм,» *Русский космизм: Антология философской мысли*, М., Педагогика-Пресс, 1993, стр. 3-33.

- (35) スチュアート・ヒューズ『意識と社会 ヨーロッパ社会思想1890—1930』生松敬三, 荒川幾男訳 みすず書房, 1970年。
 (36) 木田元「身体・感覚・精神」新・岩波講座 哲学9『身体 感覚 精神』岩波書店, 1986年, 25頁。

Сотрудничество, творящее мир :

Эволюция человека и мира в мысли А. А. Богданова

Масанори САТО

А. А. Богданов оказал большое духовное влияние на многие утопические эксперименты большевиков, например, богостроительство, Пролеткульт и НОТ. И исследования его мысли помогут выяснить менталитет большевиков. Но до сих пор философия Богданова исследована далеко не достаточно и ее место в русской и европейской мысли тоже не выяснено. Богданова считали просто еретиком в русском марксизме.

В нашей статье рассматриваются черты философии Богданова, в особенности, его теория эволюции человека и мира.

Прежде всего, Богданов кладет в основу своих взглядов на человека и мир следующее биологическое положение: всякие живые организмы стремятся к приспособлению к внешней природе в борьбе за существование. Они в этом процессе взаимодействуют со внешней природой и изменяют свою среду и форму, тем самым возрастают жизнеспособность и способность приспособления.

Применяя это положение также к психике человека и обществу, он рассматривал человека и мир с эволюционной точки зрения. Отсюда следуют такие особенности.

1) Психические системы — высшая форма приспособления. Их основой служат удовольствие и страдание. Удовольствие есть психическое отражение возрастающей энергии организма, повышающейся его жизнеспособности, а страдание — понижение жизнеспособности. Эти чувства организуют опыт организма. По Богданову развитие психики с амебы до человека — это возрастание жизнеспособности и способности к приспособлению. Это означает эволюцию. Появление человека означает новый сознательный этап эволюции.

2) Общество является одной из форм приспособления вида к внешним условиям и борьбы за жизнь. Целое общество — организм, высшая форма жизни.

3) Мир состоит из элементов опыта, и так называемое физическое тело является опытом, обобществленным людьми в обществе, социально организованным опытом. Оно означает более высшую степень развития психической

системы. Физическое тело имеет значение для целого общества в борьбе за существование. Сфера физического мира совпадает со сферой социального сотрудничества, и развитие мира сотрудничеством есть не что иное, как возрастание способности к приспособлению, эволюция жизненной формы общества.

Таким образом, в философии Богданова вселенная — бесконечные ряды комплексов различных ступеней организованности элементов опыта. Она развивается от хаоса элементов через психику низшего организма, индивидуальный организационный опыт человека до социального организационного опыта. Эволюция мира совпадает с эволюцией общества.

Богданов уверен в дальнейшей эволюции человека и мира и в завоевании человеком власти над природой. Он — проповедник мысли о сознательной и активной эволюции человека, об эволюции вселенной через сотрудничество людей.

Учитывая биологическую и эволюционную сторону его мысли, нам следует не только изменить наше понимание Богданова, но и переосмыслить его место в истории русской и европейской мысли. В России, несмотря на влияние дарвинизма, многие мыслители отрицали мальтузианство и подчеркивали взаимопомощь. Одним из таких мыслителей является Богданов. И его идею об эволюции человека можно считать вариантом русского космизма. Кроме того, Богданов заметил, что с конца 19-го века до начала 20-го века произошло великое изменение в европейской философии: отрицание детернизма и физико-психического дуализма. Он активно вносил новейшую европейскую философию в свою философскую систему. Вот почему Богданов как находится в точке соприкосновения двух больших течений русской мысли т.е. марксизма и космизма, так и в его мысли сливаются русский дух и европейская философия.